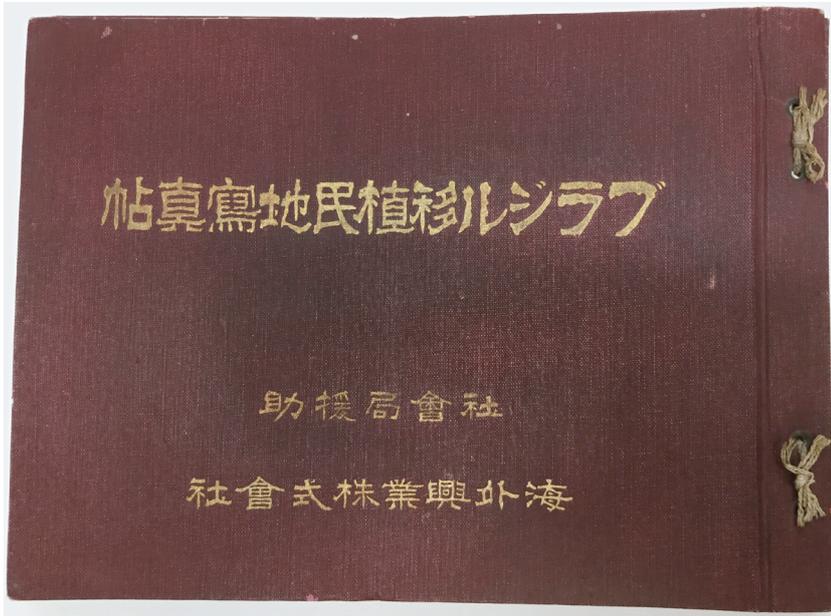


き の み な と

紀 之 水 門



資料紹介 『ブラジル移植民地写真帖』(個人蔵)

1908年(明治41)、ブラジルへの移住が始まりました。ブラジルへの渡航を考える人々に対して、あるいは渡航へと誘うために、さまざまな「渡航案内」が出版されました。このような出版物の一つとして、『ブラジル移植民地写真帖』を紹介します。

本写真帖は、1924年(大正13)9月20日、海外興業株式会社により発行された非売品で、縦横19cm×25.7cmです。内容は「目次」に始まり、「南米ブラジル国サンパウロ州移植民」の頁で、同州が農業者の天国であることや珈琲園の仕事内容などが説明されます。次に「海外興業株式会社案内」で同社の事業が示されます。続く「神戸より「サントス」に至り航路図」の解説には、神戸から60余日でサントス港に到着するとあります。次に「南米利加の図」がブラジルの位置を示し、「サンパウロ州地図」で邦人の集団地が示され、「イグアベ移民地一般図」によって土地が区画された植民地の状況を提示しています。その後は39頁に渡りモノクロ写真61点が掲載され、「奥付」で締めくくられます。

最初の写真は、1924年6月、日本郵船株式会社の「河内丸」が神戸港を出帆する様子で、デッキは移植民であふれています。サントス港に到着する船の写真に続き、「…大都会デアリマシテ鏡ノ様ナ立派ナ道路ニ堂々タル高樓ガ聳エテ…」の解説とともに、サンパウロ市やリオデジャネイロ市が紹介されます。サンパウロ市移民収容所の建物も立派で、内部には食堂や2段ベッドが整然と並ぶ寝室があり、そこで移植民は数日を過ごし、働く耕地が決定し契約を結びます。写真帖の後半は、移植民が暮らすことになる珈琲耕地の全景や珈琲木の成長過程や収穫の写真、さらに森林開墾の様子、養豚や牧畜、綿畑などの広大で豊かなイメージを喚起させる写真が掲載されています。

写真帖は、まだ見ぬ国の情報を視覚的に提示し、移植民がこれから経験する移動と労働の全容を描き出しています。それにより人々はその地の情報を得、将来への期待をも抱いたのでしょうか。一方、ブラジルで移植民が経験したさまざまな困難を知ると、これらの写真は、レンズが捉えたポジティブな一面であったという点にも気づかされます。(東 悦子)

万葉の夢歌とドリカム—私の研究のブレイクスルー

菊川恵三(和歌山大学 教育学部)

平成が終り、令和が始まりましたが、私には特別な感慨があります。というのも、平成元年は和歌山大学赴任の年であり、平成の30年間は私の和歌山大学時代でもあるのです。全くの偶然ですが、そんなことを思いながら、研究の過程で経験した面白いお話を記してみます。

20代、古事記、万葉集を中心に試行錯誤するなかで、ようやく自分らしいテーマを見つけることができたのは30代後半。「万葉の夢歌」がそれでした。

うつつには直には逢はず 夢にだに
逢ふと見えこそ我が恋ふらくに
(12・二八五〇)

万葉集にある約百首もの夢、その中で目につくのは、ここにあげたような逢えない相手に向かって「夢に見えこそ」(せめて夢に現れてほしい)と訴える歌です。高校時代、古典の先生が「古代人は夢を見るのは、自分が相手を恋しいからじゃなく、相手が自分を恋しいと思っていたからだ」と話すのを聞いて、そんなばかなと思ったものです。しかし、この万葉の夢歌からはそんな考えがあったことを予想させます。何せ相手の夢に現れるのが、愛情の証しなのですから。

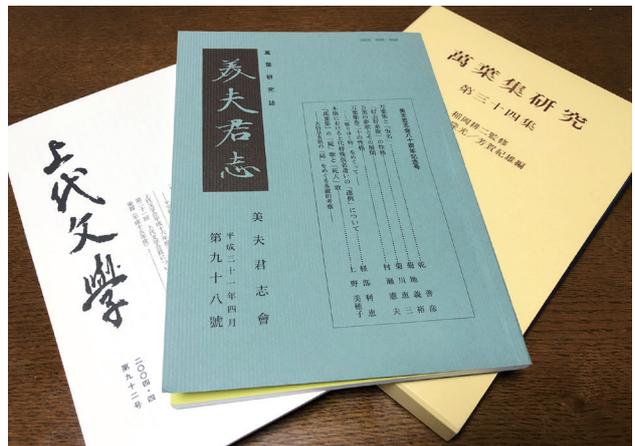
もっとも、神仏との交流のために夢を求める話は、古代文学のあちこちに見られます。崇神天皇が神意を聞くために夢を求めたり(古事記)、観音様からの夢告げを求めて長谷寺に参籠したり(蜻蛉日記・藁しべ長者)、聖徳太子が籠もったお堂が「夢殿」と呼ばれた例もあります。このように、古代に夢信仰があったことは確かですが、万葉の夢歌もその一つなのではないでしょうか。釈然としないまま、あれかこれかと悩んでいた時、カーステレオから流れてきた曲にはっとなりました。それは1990年代にヒットしたドリカム・カム・トゥルー(ドリカム)の「ラブ・ラブ・ラブ」です。

ねえ、どうして、すごくすごく好きなこと、
ただ伝えたいだけなのに、
ルルルルルー、涙が出ちゃうんだろ。
ねえ、どうして、夢で逢いたいと願う、
夜に限って、一度も、
ルルルルルー、出てきてはくれないね。

なんと、この歌詞は、万葉の「夢に見えこそ」と通じるではありませんか。作詞の吉田美和さんに古代の夢信仰が残存したはずもなく、彼女が万葉集から学んだとも思えません。

もっとも詳しく歌詞をよむと、逢いたいと思う夜に限って現われてくれないとの恨みは、どう考えても理不尽な話です。しかし冒頭の、好きなのにそれが言えないもどかしさに続く時、このままで切ない女性の恋心が浮かび上がってきます。ここには、時間を越えて通底する恋歌の表現があるようです。

どうやら私はこれまで、歌の表現を古代人の思考や信仰と安易に結び付け過ぎていたようです。夢信仰と歌表現を切り離して考えると、いろいろ気づくことができました。同一人物が自分の見た夢を、時に相手の思いから、時に自分の思いからだとうたった理由が解り、また夢と思いの関係をうたう歌に決まった形式があることを発見しました。こうして、私の前に広がってきたのは、独自に展開していく万葉相聞歌の世界でした。



日本庭園の歴史

小野健吉(和歌山大学 観光学部)

奈良文化財研究所に勤務していた頃から研究の対象としている分野が、日本庭園史である。日本庭園は一般の関心もわりあい高く、京都のお寺の庭園などは内外からの多くの観光客で賑わっている。しかし、庭園史の研究は明治時代から始められたとはいうものの、現在、その研究はけっして盛んではない。絶学の恐れもあるのではないかと危惧しているほどである。一方、そうした状況であればこそ、私自身は興味の赴くままに対象とする時代等に捕らわれることなく庭園史の研究に取り組むことができたという側面もある。ここでは、日本庭園の歴史に関して、三つの観点から紹介しておきたいと思う。

「日本庭園」のデザインの始まり 私たちがイメージする日本庭園というと、金閣寺や桂離宮あるいは兼六園などが頭に浮かぶのではないかと思う。こうした庭園のデザインに注目すると、池や流れの形などは自然ふうの曲線を基調とし、加工しない自然石を景石として用い、水は上から下へ流れ或いは静かに佇む、といった特色が挙げられる。自然を規範とするこうしたデザインが始まったのは奈良時代。考古学的発掘調査の成果によれば、飛鳥時代の庭園デザインの特徴は、方形など幾何学的なプランの池／池の石積み護岸／精緻な加工を施した石造物の3点に集約される。一方、奈良時代の庭園デザインは、不整形な曲線の輪郭を持つ池／州浜(緩勾配の岸に小石を敷き詰める手法)等の柔らかい池の護岸／自然石の景石や石組が3つの特徴である。庭園デザインのこの急激な変化は、結論的に言えば、飛鳥時代には朝鮮半島の百済であった日本における庭園モデルが奈良時代には唐に変わったことによる。ここで詳しく述べる余裕はないが、ご興味のある方は拙著『日本庭園—空間の美の歴史』(岩波新書)などをご覧いただければと思う。

建物と庭園の関係 庭園と建物は切っても切れない関係にある。その関係を整理すると、建物に庭園が付随するタイプと庭園が建物を包含するタイプに分けることができる。概して言えば、前者は建物が中心となる本邸での形式であり、後者は遊びの要素が強い、例えば桂離宮のような別邸での形式である。前者はさらに主要建物の前面に庭園を配置する前庭型と背面に配置する

後庭型に分類でき、おおむね前庭型の庭園は正式の空間、後庭型の庭園は私的な空間と位置付けることができる。龍安寺方丈庭園(石庭)と大徳寺大仙院書院庭園は、しばしば枯山水の代表的な庭園として取り上げられるが、前者は方丈の前面に展開する正式の空間であるのに対し、後者は方丈北東隅の住職の居室・書院に付随する私的な空間であり、そもそも空間の質が違うことを忘れてはならない。庭園を見る機会には、建物との関係にもぜひ注目していただきたいと思う。

寺院と庭園の関係 宗教施設に造形性豊かな庭園が造られることは、日本以外の国や地域ではほとんどない。欧州のキリスト教会や中東のイスラム教モスクに素晴らしい庭園があるという話は聞かないし、仏教圏を見ても東南アジア諸国の寺院はもとより中国や韓国の寺院に見事な庭園が設えられている事例もほとんどない。では、なぜ日本の寺院で見事な庭園が造営され、庭園の文化が開いたのか。実はこれは一言では説明できない。平安時代前期における平安京郊外の庭園を伴う貴族別荘の寺院への転換にはじまり、極楽浄土の具現を目指す平安時代中・後期の浄土庭園の成立と盛行、後庭を伴う鎌倉時代の禅宗伽藍形式の成立と南北朝期の禅僧・夢窓疎石の作庭活動、室町時代の北山殿(金閣寺)と東山殿(銀閣寺)の造営などが重なり、江戸時代には各宗派寺院において庭園がいわば必須の装置となったという、まさに歴史の積み重ねの結果なのである。

和歌山県にも名勝庭園(文化財庭園)6か所をはじめ優れた庭園は少なくないが、あまり深く研究されているとは言い難い。和大での残された2年間のうちに和歌山の庭園も少し調べられればと考えている。



TwitterやFacebookの動画もCheck It Out !!

紀伊半島のロギオスたち— λόγιος — 紀州研に所属する研究者(ロギオス λόγιος)たちの 研究を紹介します

紀伊半島は水害常襲地である。1889年の十津川大水害や1953年の紀州大水害では、和歌山県だけでそれぞれ千名以上の死者・行方不明者を出している。記憶に新しいところでは、2011年の台風災害で死者・行方不明者61名(和歌山県)の被害が出た。

その中でも古座川流域は、年間降水量4000mmという国内最大級の多雨地域を擁し、2011年には場所によって4mを超える浸水深を記録した。

この古座川中流域には、「水上げ」と呼ばれる特別な空間がある。それは、浸水のリスクが高まったときに、種籾や家財を移し避難するための場所である。急な増水時や夜間でも逃げ込めるよう、母屋のすぐ近くに設けられ、荷物を担ぎ込めるしっかりとした動線が確保されている。



いちぶり
一雨地区のとても美しい水上げ小屋

「水上げ」は、水害に備えたシェルターであるが、単なる避難所ではない。リスクと生活の利便性、さらには家族の持続性のバランスを見事に体現した建物である。水上げがあることで、母屋は利便性を重視した立地をとることができるし、かりに母屋が浸水しても、水上げで暮らしながら母屋を片付け、復旧させるこ

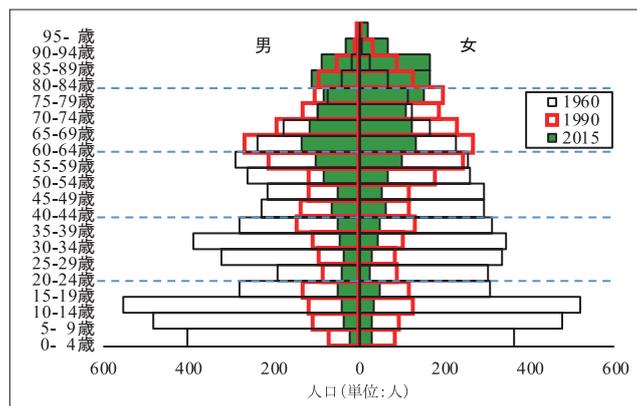
とができる。古座川の豊かな水の恵みとともに、水害のリスクを引き受けて、そこで豊かに持続的に暮らしていくための知恵である。

古座川には、いまでも夏になれば家財や位牌を水上げに移動させる住まい方が生きており、地域の気候風土から生まれた、おそるべき生活文化だと考えている。

(平田隆行/建築学)

私は人文地理学を専門とし、地域人口の分析を通して、地域が変容していく過程を研究しています。人口減少期に突入した日本社会では、将来推計人口をもとにした地方創生の各種試みが実践されるなど、地域を映す鏡としての人口に注目が集まっています。ここでは、和歌山県旧美里町の人口の変化を見てみましょう。

過疎化の進展した旧美里町では、1960年以降、30年ではほぼ半減するという速さで人口が減少しました。年齢構成の変化を見ると、1960年～1990年には60歳未満が大幅に減少し、60歳以上が増加しましたが、1990年～2015年に増加したのは80歳以上だけです。生産年齢人口の流出とそれに伴う出生数の減少、そして当地にとどまった人々の加



旧美里町における男女・年齢階級別人口の推移
国勢調査により作成。

齢による高齢化がグラフに現れています。年齢構成を示す人口ピラミッドは、下部で幅広いピラミッド型から細身のろうそくとその灯りのように上部で膨らむ形へ変化しました。

このような状況は全国の過疎地域で広く見られ、近年、若年層の流出よりも高齢者の死

亡のほうが多くなっています。こうした流れを食い止めようと、和歌山県は他県に先駆けて若者の農村移住を促してきました。近年では、田舎で生活する人々への関心が全国的に高まっています。人口分析は、地域性の解明という学術面から市場調査や地域政策などの応用面まで、幅広いテーマに対して基礎的な知見を提示しています。

(山神達也/人文地理学)

「歴女」の観光と 真田幸村

私が現在取り組んでいる研究テーマの一つに「歴女」の観光がある。歴女は、歴史に関心を持つ女性の呼称で、「戦国BASARA」や「薄桜鬼 ～新選組奇譚～」、最近では「刀剣乱舞」などのコンピューター・ゲームに触発されて歴史

に関心を持ち、ゲームに登場する好みのキャラクターに関係する場所を訪れる若い女性を含む。この中で私が実際に調査をしているのは「刀剣乱舞」ファンの観光であるが、真田信繁(幸村)ファンと和歌山県九度山町にある「九度山・真田ミュージアム」の関係にも注目している。九度山は、よく知られているように真田昌幸・信繁父子が関ヶ原の敗戦後に蟄居した場所である。この博物館は、2016年のNHK大河ドラマ『真田丸』の放映のタイミングに合わせて



戦国BASARAのキャラクター・真田幸村がペイントされたタクシー

同年3月に開館したが、戦国BASARAを通じて真田ファンとなった女性も意識して、このゲームと関連づけた誘客も図られている。興味深いのは、真田信繁の戦国BASARAでの姿が非常に格好よく、信繁として伝えられてきた肖像画とは似ても似つかない点である。私の関心は、

こうした実際とはかけ離れたルックスを持つゲーム上のキャラクターのファンとなり、その人物に縁の場所を訪れるという女性の観光スタイルにある。その女性の人物への思い入れ方、訪問した場所との関わり方は、これまで男性が中心だった歴史観光とは大きく違うのではないかと思っている。「刀剣乱舞」観光の次には、九度山・真田ミュージアムを通じて、そうした課題を探索してみたい。

(吉田道代/人文地理学)

紀州研 新体制スタート

2019年度を迎え、紀州研の新体制がスタートしました。新所長には、菊川恵三先生(教育学部/古代日本文学)、副所長には大橋直義先生(教育学部/中世日本文学)と長廣利崇先生(経済学部/日本経済史・経営史)が就任しました。所長、副所長、紀州研専任教員、任命された幹事によって構成される「幹事会」を毎月1回程度開催し、研究所の運営に関する重要事項や予算について審議・承認をします。また、所長、副所長、紀州研専任教員、展示・研究・教育の3つの部門長および副部門長をメンバーとする「企画会議」が、幹事会で審議された事項の遂行を担っていきます。

今年度は、従来どおりの展示活動を行なうだけでなく、地域の文化財・文化資源についてソーシャル・ネットワーキング・サービス(SNS)を用いた情報発信、体験型ワークショップやイベントの開催、地域の小・中学校における教育活動との協働を図り、これまで以上に展示・研究・教育の各部門の連携を強化していきます。

大学では、紀州研所員によるリレー講義「わかやまを学ぶ」を開講しています(前期・金曜4時限)。人文・社会・自然科学にまたがる幅広い視点から「わかやま」が持つさまざまな側面について理解を深め、ひいては受講生自身が「わかやま」の情報発信者になることをめざしています。今年度は、人数制限(250名)を超える履修登録があり、抽選の結果、履修者が確定しました。また、学外からも3名の方が「学部開放授業登録者」として受講しています。

今年度も紀州研へのお力添えをいただきますよう、お願いいたします。

(西倉実季)



紀州経済史文化史研究所では2010年企画展「紀州研所蔵の和歌の浦資料」での御船歌復興への参画、また翌2011年の特別展「みる・きく・たのしむ和歌祭」の開催以来、毎年和歌祭に関するさまざまなテーマの企画展を開催して参りました。そして昨年企画展「唐人復興！—和歌祭の唐物様(唐船・唐人)—」では、本学国際学生部門(現・国際連携部門)の協力のもと本学留学生によって352年ぶりとなる唐人の復興を遂げ、2019年度は企画展「和歌の浦と和歌祭」と題した展覧会を開催しました。

和歌祭が開催される和歌の浦は旧紀の川河口に形成された全国的に見ても類稀な景勝地です。中央には長く突き出した片男波の砂嘴がのび、その内湾には近畿最大級の干潟が広がっています。この景勝地「和歌の浦」は歴史的にみても非常に重要な地でもあり、万葉の時代から聖武天皇をはじめとして多くの歴史上の人物が訪れています。それが評価され、2010年に名勝に指定、また2016年には「絶景の宝庫 和歌の浦」として日本遺産に認定されています。この景勝地「和歌の浦」は紀伊藩初代藩主徳川頼宣も注目し、中国の瀟湘八景を模した景勝地の形成を手がけ、東照宮や観海閣など多くの建造物を建造しています。その東照宮では、頼宣と天海によって1622年(元和8)から紀伊藩を代表する華やかな風流の大祭として行なわれたのが和歌祭でした。

本展では、これまでに当研究所が収集した和歌の浦の関係資料を「景勝地としての和歌の浦」と「和歌祭」の2つのコーナーで公開いたしました。

オープニングイベント：和歌祭御船歌・唐人練り歩き

企画展「和歌の浦と和歌祭」のオープニングイベントとして2019年4月10日(水)の12時30分から13時10分まで、和歌祭で唐船・御船歌(2010年に当研究所も参画して復興)を担当している唐船御船歌連中と本学留学生(教養科目「日本事情」受講生)による和歌祭御船歌・唐人練り歩きを実施しました。この企画は2011年の特別展「みる・きく・たのしむ和歌祭」から毎年実施しているもので、2017年から当時の留学生によって復興された唐人が加わっています。このイベントは企画展を学内外にアピールすること、また和歌祭を学内で周知してもらい紀州の「藩祭」和歌祭への来客と参加者を募る目的で行なっています。本年は残念ながら雨天のため、図書館前で唐人装束の披露と御船歌の公演のみを行ない、観客および本学シンボルゾーンを通行する学生に企画展および和歌祭のチラシを配布しました。



関連イベント：和歌祭見学会

企画展「和歌の浦と和歌祭」の関連イベントとして2019年5月12日(日)に開催された和歌祭において、紀州東照宮境内に紀州研特設ブースを設け、10時30分から渡御行列が出発する12時まで『増補・改訂版 みる・きく・たのしむ和歌祭(2011年度特別展図録兼和歌祭ガイドブック)』を学生による紀州研ボランティアが配布し、見学会を実施いたしました。また、唐船に参加する紀州研ボランティアや授業で参加している本学学生の引率を吉村旭輝幹事および長友文子所員が行ないました。(吉村旭輝)





葛城修験の信仰・言説・儀礼 一向井家文書・聖護院文書の コスモロジーとその四周一

2019年3月9日(土)午後、和歌山県立博物館2階学習室において、標記のシンポジウムを開催しました。当日は、県博の企画展「国宝・古神宝の世界」の初日にあたり、同館学芸員の坂本亮太氏による特別ミュージアムトークを頂戴したこともあって、100名超のご参加を賜りました。



当日は、次の4名の研究者による報告をまず行ないました。小橋勇介氏(和歌山市立博物館)「向井家文書からみた葛城修験」、長村祥知氏(京都府京都文化博物館)「聖護院文書にみる葛城嶺修行」、大橋直義(和歌山大学)「『七宝瀧寺縁起』と志一上人のことなど」、大河内智之氏(和歌山県立博物館)「中津川行者堂碑伝にみる葛城修験の護法善神一深蛇大王と二上権現」。大河内氏の報告に関わって、同館に寄託されている中津川行者堂の「碑伝」も実際に展示していただき、文化財そのものを目の当たりにしながらの聴講となりました(なお、同堂の本尊役行者像と前鬼・後鬼像はかつて盗難され、本尊像のみは取り戻すことができたものの、前鬼・後鬼は未だに行方知れずのまま。近年、県博が力を込める仏像盗難被害撲滅のためのアクションのシンボルのひとつとなっています)。

シンポジウムはその後、弊所に寄託される向井家文書の整理に深く関与いただいた藤本清二郎氏(本学名誉教授)より、市立博物館と弊所に分置されることになってしまった向井家文書の全体像についての発言を頂戴したのを皮切りに、文書・文化財のみならず、葛城修験という営みそのものについて、さらには女人禁制という現代へも連なる課題について、深くかつ本質的な議論が行なわれました。とりわけ、フロアから議論に加わってくださった聖護院門跡門主・宮城泰年猊下、鈴木正崇先生(慶應義塾大学名誉教授)に深く御礼を申し上げます。

2019年秋にも葛城二十八宿に関わる特別展を企画しています。特別展のみならず、公開シンポジウムにも大勢の方にお集まりいただけますことを願っています。(大橋直義)

2019年 わかやま文化財の「匠」講座 「たのしい古文書 一学んで、さわって、 調べてみよう」参加記

2019年5月18日(土)和歌山大学西5号館(図書館)マルチルーム1にて、14時から16時まで、紀州経済史文化史研究所主催の古文書講座が行われた。当該講座の講師は、神奈川県立金沢文庫学芸員の貫井裕恵先生である。講座の前半部分は、東寺百合文書・金沢文庫保管称名寺聖教の調査・研究に携わる貫井先生が、古文書の魅力や、見るポイントをわかりやすく伝授して下さった。古文書のたのしみ方としては、「かたち(文字・切れ目・折れ目)・かさなり(文書発給の流れ)・かたまり(どこに伝来したのか)」という三つのポイントがあるという。一例をあげると、「足利義満自筆仏舎利奉請状」(「東寺百合文書」き函37)では、義満自身を筆頭に、右から順に一行に一人ずつ、名前が記載されているが、人名の書き出し位置が徐々に下がっていく。これはいかに義満自身が高貴であるのかを「かたち」で表しているものである。このように、文字がよめなくとも、ある程度「かたち・かさなり・かたまり」を意識して文書を見ることで、文書の理解へとつなげることが出来ることを教えて頂いた。

後半では、「古文書体験」と題して、紀州経済史文化史研究所に寄託されている湯川久弥家文書を使い、調書をとるという作業を行った。古文書に使われている紙質の特定に当たっては、顕微鏡を用いるなど、まさに「匠」という当該講座のテーマにふさわしい内容が織り込まれていた。参加者が古文書の魅力にも、そして古文書そのものにも触れることが出来る、有意義な時間となった。(三光寺由実子)





2019年
わかやま文化財の「匠」講座
紀州研バス&
トレッキングツアー参加記

5月19日の紀州研バス&トレッキングツアーは「湯浅町の歴史・生活・産業遺産をめぐる」旅であった。快晴の午前8時30分にバスは出発した。車中では本学の海津氏による世界史のなかの紀州、上野氏による湯浅の歴史、そして招待講師の定藤氏によるフランスと紀州との比較史が講じられた。急ぎバスは神光寺近くの明恵

上人星尾遺跡に到着。ここは明恵上人が春日明神の信託を受けた場所とされる。さらにバスで施無畏寺に移動。ここでは貴重な文書類をみる事ができた。明恵の花押はもとより、寄進状は経済史研究者には興味深い。文書に別れを惜しみながら施無畏寺の背後に佇む史跡へ。険しい山道を超えて西白上遺跡を拝み、毛虫との邂逅を恨みながら東白上遺跡に到着。これらの場所は、明恵上人若き日の修業の地である。

昼食に湯浅名産のシラス丼を食べた後、ガイドの案内により湯浅の町並みを見学。醤油と金山寺味噌の製造場などを楽しむ。「重要伝統的建造物群保存地区」に指定されている湯浅の町は小ぶりながらも徳川時代や明治時代の雰囲気が残る。深専寺の「大地震津波の碑」には安政の大地震の際の教訓が刻まれる。一行は最後の目的地となる明恵上人誕生地を訪問した後、吉村氏の解説による伝統芸能の映像をみながら移動。JR和歌山駅付近で解散となった。今回のツアーに参加して、歴史はつくり、つくり続けられるものと実感。歴史は、それがつくり変えられる力を失った時、色あせてしまうのであろう。

(長廣利崇)



information

2019年度

企画展 紀州地域の文化財—館蔵品・寄託品展—

会 期／2019年6月13日[木]～8月2日[金]

会 場／和歌山大学 紀州経済史文化史研究所 展示室(図書館3階)

入 場／無料

開館時間／10:30～16:00

休 館 日／土・日・祝日・図書館休館日

※6月22日[土]、7月27日[土]は13:00～16:00の間、開館します。

紀州経済史文化史研究所には、紀州地域の様々な場に伝来した古文書や文化財が数多く寄託されています。本展覧会では、近年に紀州研が購入した新収文化財に加えて、そのような地域社会に関わる近世文書を展示し、その地域史的な意義や面白さについて、じっくり、分かりやすく考えてみたいと思います。三浦家文書・向井家文書・桑山家文書・杉浦家文書・神野市場村文書・清水村文書が中心です。

加えて、紀州研寄託・一ノ橋文庫から、「縁起」「聖教」「巡礼」をテーマに、主に紀州地域に関わる古典籍を展示します。



一ノ橋文庫蔵「日域六十余州道中日記集」